

幼稚園は学校教育のスタートです

幼稚園は学校教育法に基づく学校で
子供が初めて出会う学校です

教科書、黒板、机があるなどが学校のイメージであったり、また、小学校で習う知識のみを先取りしたり、受験などを念頭においたりなどの目先の結果のみを期待する、いわゆる早期教育とは本質的に異なります。

多様な活動を経験することによって好奇心や探究心を養い、生涯にわたる学びの基礎をつくっています。いわば「後伸びする力」をはぐくんでいます。

幼児期の独自性を失わずに正規の教育の一環として、学校教育法第1条に「この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、大学、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする。」

(昭和22年3月1日)と示されました。ここに、幼稚園が、子供が初めて出会う学校としてスタートしたのです。

その後、約60年近くの年月が経過し、幼稚園を取り巻く状況はずいぶん変化しました。

桐生市立幼稚園においても、子育て支援や未就園児のための遊びの会、教育課程外の教育活動「終了後保育」などが実施されるようになり、幼稚園の教育活動が拡大してきています。

しかし、幼児の遊びや生活を大事にし、幼児期にふさわしい生活を展開しながら教育を行い生涯にわたる人間形成の基礎を培うという、幼稚園教育の本質は変わっていません。

幼児が遊びや生活の中で、多様な体験を着実に積み重ねていく教育は、次第に児童期へと発達を促していくのです。

平成19年に学校教育法が一部改正され、第1条は「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする。」となっています。

“遊び”が幼稚園の教育で大切です

幼稚園では、幼児の主体的な生活を豊かにし、人間関係を深めることを大切に学んでいます。

幼稚園は、小学校のように一定の知識や技能を教えたり教科書で学習したりするところ

ではありません。幼児期にふさわしい生活を展開しながら、心身の発達が助長され、人間形成の基礎が培われるところです。

そして、幼児期にふさわしい生活とは、自己発揮できる雰囲気の中で、安定した情緒でのびのびと遊び、素朴でも『自分で考え、自分で行動し、生きる基礎となる体験』をする生活です。

何かを得るためには、自分が腰を上げて、自分たちの力で得る以外にはないということを、幼児は友達と一緒に毎日遊び込む中で失敗や満足感を繰り返し味わいながら、小学校へ上がったからの必要な力を身に付けていくのです。



小学校以降の生活や学習の基盤をつくります。

学校の授業を楽しめる子、勉強の好きな子は、幼児期に知的好奇心や探究心が高められた子だと言えます。

遊びの中で様々なことに気付き、思いを抱き、そこから考え、試したり、工夫したり、表現したりしていく過程は、課題をもって物事に取り組む姿勢につながっていきます。

すなわち、そのことこそが、小学校以降の学習の基盤となっていくのです。

幼稚園は小学校以降の学習の基盤をつくります

幼児は幼稚園での生活を通して、人とのかかわり、自然とのかかわり、言葉への興味・関心、知的好奇心など、学習の基盤となる、関心・意欲・態度を身に付けます。

幼稚園教育では、字が読める・計算ができるという入学前の「早期教育」のような目先の結果のみを重視するのではなく、園生活を通して他の幼児との集団活動を行ったり、家庭では体験できない社会・文化・自然に触れたりするなど教師の専門的で計画的な支えの中で多くの経験をし

ます。その結果、好奇心や探究心を養い生涯にわたる「学び」の基礎をつくっていきます。

このような中で身に付く力を「後伸びする力」と言い大切にはぐくんでいます。

人とのかかわり

近年、子供の育ちが何かおかしいと指摘されております。

これは、基本的な生活習慣の欠如・コミュニケーション能力の不足・自制心や規範意識の不足・運動能力の低下・小学校生活への不適応・学びに対する意欲・関心の低下などに表れています。

そこで、幼稚園では幼児が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感からうまれる人に対する信頼感を持つこと、また、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立することの中で、人とかかわる力の基礎を養っていきます。

教師との信頼関係を基盤にしながらかつ実感を、多くの友達と触れ合う中で、感情や意志の表現を、さらに、園内の人だけでなく地域の人々とのかかわりから共に行動する楽しさや共感・思いやりなどの感情が養われていく、このような積み重ねが人とかかわる力を育てることになります。

人とかかわる力が学びの土台となり、協同的な活動場面で主体的に活動できるようになるなど小学校での学び合いの姿につながっていきます。

< 高齢者と遊ぼう >

高齢者と一緒に遊ぶ楽しさを味わうために公民館に着いた幼児たちは、お年よりの方々が沢山いるのにびっくりした様子だったが、元気に歌を歌ったことやリズムを褒めてもらったことで少しずつ緊張がとけてきた様子が見え始める。A子は、お手玉を持って「おばあちゃん一緒に遊ぼう」B男は「こま回しをしよう」などと言いながら高齢者の所にそれぞれ寄って行く。高齢者は

「うん、遊ぼうね」「教えてやるよ」と、うれしそうな顔をして、「一人お手玉」や「きのこ回し」などを見せてくれたり、遊び方を教えてくれたりした。そのうち、お互いに自己紹介をしたり「今度幼稚園に遊びにきてね」「運動会で玉入れを一緒にしようね」「ありがとうね。楽しみにしているよ」と会話も弾んでいた。

その後、遊んでもらったお礼に肩たたきと壁掛けのプレゼントを高齢者に渡して短い時間だったが楽しい時間を過ごすことができた。



自然とのかかわり

地域によって幼児を取り巻く環境は異なり、自然環境にも違いがあります。幼児は興味・関心のないものには気付かないことが多いものです。その季節ならではの自然と出会う体験は、幼児の心を動かし、自然への関心を高めていきます。幼稚園では、日頃から地域の自然環境や変化などを把握し、自然と出会う機会を積極的につくっています。下記の場面では、地域の環境を生かして果物の生長を実際に体験しました。その中で幼児なりに成長の不思議さや神秘さを感じ、興味・関心を高めていきました。

このような体験は、小学校以降の「生命の大切さ」「不思議さ・探求心」など、学習の基盤となっていくのです。

ブドウの赤ちゃんは？

5月中旬、地域のブドウ園にぶどうの赤ちゃんを見に行く。ハウスに入ったとたん「暑いね」と口々に言う。昨年経験している5歳児は「温かくないとブドウが大きくなるんだよ」と、自信をもって言う。その後は、「あっ、ブドウの赤ちゃんだ。まだ小さいね」「あの緑のが、ブドウになるんだよ」などと友達同士の会話が弾む。ブドウ園のおじさんへの質問タイムでは、それぞれの幼児が疑問に思ったことなどを聞く。「何でハチがいっぱい飛んでいるの?」「どこで暑くしているの?」「いつブドウが大きくなって食べられるの?」・・・いろいろなことを学び、ブドウの赤ちゃんをたくさんもらって帰る。

園に戻り、ブドウの赤ちゃんを花瓶に挿す、土に植えるなどして観察するが、いつになっても大きくなる。だんだん枯れてしまうブドウの赤ちゃんを見て、「やっぱり木でなければだめみたいね」と、気付いてくる幼児の姿が見られる。

9月初旬、ブドウ狩りに行く。大きくなったブドウを見て驚く幼児が多い。「わー、大きい。おいしそうになったね」「あんなに小さかったのにね」「何でこんなに甘いんだ?」など発見や喜びの言葉が自然に幼児の中から出てくる。



言葉への興味・関心

一般的に幼児期の言語の発達には「聞く」「話す」「読む」「書く」という順序で体得していくといわれています。この時期に言葉への興味・関心を育て、人と言葉を交わす喜びを味わわせることは、生涯を通して必要な言葉で伝え合う力の基礎を培うこととなります。幼稚園では、そのようなことをふまえて、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を高めるために、日常生活において繰り返していいいに指導を行っています。主には、経験したことや考えたことを自分なりに言葉で表現すると共に、相手の話す言葉をじっくり聞く機会を意図的に取り入れています。又、自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを十分に味わわせるために、一人一人の幼児の発達の様子をよく見つめて、その幼児の表現しようとする思いを大切にしながら援助しています。また、幼稚園では遊びを通していろいろなことを学ぶことができるようにすると共に経験したことを自分の言葉で表現することで、身近な人とのコミュニケーションが図られるようにしています。

この、言葉で表現する楽しさを十分に味わうことは、小学生低学年の目標である、相手に応じ経験したことなどについて事柄の順序を考えながら話すにつながり、『言葉で伝え合う力の育成』につながっていきます。

<夏休みに海へいったんだ>

夏休みにいろいろ経験したことを、仲良しの友達同士で話をしている。「あのね、夏休みにね、お父さんと海に行ったんだ。それでね、海の水を飲んじゃったんだ。すごーくしょっぱかったんだよ」しょっぱそうな表情をして話す。そして、話ながら、その状況をもっと友達に分かってもらいたくなり「あっそうだ、僕んちね、4人家族だからみんなで行ったんだ」そばで聞いていた幼児も、友達の話す内容を聞き取り「僕も海の水、飲んだことある」と共通に経験したことを話し出し「僕はね、貝殻拾ったよ。それにね、魚もみた。きれいだったよ」と気持ちを言葉にして表現する。

共通の話題から、友達同士のコミュニケーションもより図られるようになってきているので、内容を聞き取りながら、じっくりと話せる環境を保障する。

数日後、海の話で盛んに話しをしていた幼児二人が、一緒に絵本を見ている。秋の虫の図鑑であったが、それぞれの幼児が自分の経験したことや知っていることなど、言葉に出して表現しながらかかわりを楽しんでいる。身近な人とのかかわりの中で、自分の思いや考えを表現しながら、言葉への興味・関心をますます広げていっている。



知的好奇心

子供はよく「知りたがりやで、試したがりやである」と言われています。遊びの中で新しいものに出会うと、それをめざとくとらえ、見たり触れたりして、驚き、発見、喜び、などの感動体験が、知的好奇心を引きだします。その結果、子供は様々な「もの」や「ものごと」、法則性などを知り、自分の世界を広げていきます。さらに「もっと知りたい」という意欲が高まってきます。つまり、遊び 感動体験 知的好奇心 主体的な環境への働きかけ 意欲 遊び という循環の過程をたどっています。子供の発達にとって知的好奇心をもたせることは大切です。幼稚園では子供が与えられたものでなく主体的に働きかけることのできる環境の構成を工夫しています。教師は子供の発見に気付き、何に心を動かされているかということを理解し、知的好奇心をかき立てるような保育を展開しています。

子供が周囲の環境に触れ、知性や感性をとともに働かせ、その意味や仕組みを考え、それを周囲の人々と共有していく過程そのことが幼児期にふさわしい知的教育です。このような経験を十分に積み重ねることによって、新しい学力観として、今、学校に求められている自ら学び、自ら考えるという「生きる力」の基礎を形成していくことができます。

<ダンゴムシ みつけた>

幼児が身近な自然にじっくり触れながら性質や仕組みに興味や関心もち、変化や気付きが感じとれるような環境の構成や援助をしている。4歳児A男が庭でダンゴムシを見つけた。触ると丸まってしまうことにはじめて気付いた。教師はそばにいてA男の気持ちに寄り添うように感動したり言葉を受け止めるようにした。翌日、植木鉢の下からダンゴムシがいっぱい出てきた。A男は夢中になって集め、模様があたり無かったり、大きい小さい、色が違う、など気付いたことを、知らせようとする。教師はA男の言葉を真剣に受け止め共感するようにした。「何を食べるのかな?」と考えている。A男のもっと知りたいという知的好奇心をかき立てるようにこの時期の虫の絵本を出しておいた。「お部屋にダンゴムシの本があったから見よう」と言って取りに行く。本を見ながら住んでるところ、えさ、種類がわかってうれしそうだった。このことがきっかけで他の虫にも関心を広げ、図鑑で調べようになった。幼児自ら様々な感動体験を積み重ね、じっくり取り組むことで身近な環境の変化に気付き積極的にかかわっていくようになっている



道徳性の芽生えを培います

幼稚園教育の目標の1つに「道徳性の芽生えを培う」ことがあげられています。

道徳性の芽生えを培うために、幼児期に育てたいものとしては、〔善悪の判断・思いやりの心・決まりを守る意識〕があります。

幼稚園では、幼児が友達と一緒に遊ぶ中でいざこざや葛藤を体験し満足感を味わいながら人間形成の基礎ともいべき道徳性の芽生えを培うよう指導しています。

善悪の判断・思いやりの心・決まりを守る意識などが育つことにより、小学校の道徳の「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする」につながっていきます。

善悪の判断

幼児期は、自分の行動について客観的に考えることや善悪の判断がまだできにくい時期です。周りの大人から、認められたりほめられたりすると「このことは、良いことなのだ」と考え、叱られたり注意されたりすると「このことは、良くないことなのだ」とわかるようになり、「してよいこと」と「して悪いこと」を学んでいきます。

しかし、本当の意味でやってはいけないことを理解し、判断ができるようになるためには、なぜやってはいけないのか、幼児なりに考える場をつくる必要があります。

そこで、幼稚園では、集団生活の中で幼児が友達とのいざこざや葛藤を体験し、それを乗り越えながら人間関係について学び、自己を抑制する気持ちをもてるような色々な場面をとらえて指導をしていきます。その結果徐々に、自分なりに良いことと悪いことの判断の基準ができ、自分で気付くようになってきます。このような体験が、小学校での教育活動全体における自己判断、自己決定するための力へとつながっていきます。

<貸してあげるよ>

入園してまもないころ、A男は、友達が使っている物を無理矢理取ったり、通りすがりの友達を突然押したり、傍若無人の行動が目立った。母親との懇談から、家庭においては弟の面倒をみたり、母親の手伝いをしたりと大変良い子であることがわかった。そこで、教師は家庭との連携をとりながら場面をとらえては、A男の行動が友達に苦痛を与えていることや、そのことで悲しい気持ちを伝えるようにした。このような指導を繰り返すことで「友達の物は勝手に取ってはいけない」など、善悪の判断が身に付くようにした。

七月の中旬、B男の使っている物がほしくなり、突然奪い取ろうとしたことでトラブルになったが、A男が「B男ちゃんに貸してあげる」といって手をひくことができた。A男は様子を見守っていた教師のところに「僕、B男ちゃんに貸してあげたよ」と笑顔で報告にいった。その後のA男は、徐々にではあるが「して良いことと悪いこと」がわかるようになってきた。



思いやりの心

他者の存在に気付き、人とのかかわりを求め始める幼児期に育てておきたいことの一つに「思いやりの心」があります。幼稚園では、大人の側から一方的に教えることなく「相手の気持ちに気付き、相手の気持ちになって考え、表現しようとする気持ち」が育つようにするために、自分の気持ちを表す 相手の気持ちに共感する 相手を分かろうとするなど体験を通して学ぶことができるようにしています。

思いやりの心は、友達やいろいろな世代の人、生き物などとのかかわりを通して、自らゆっくりとはぐくまれていきます。このようにはぐくまれた芽が、小学校以降の、道徳的心情へとつながっていきます。

<お花が咲いている所にお墓を作ってあげよう！>

元気がよくやや自己中心的な行動をとることの多いS男は、あまり虫が好きではなかった。しかし、クラスの友達の姿に刺激をうけ、だんだんに虫に関心をもつようになり友達と一緒に虫探しをしたり、虫メガネで飼育箱の中の虫を観察するようになってきた。教師は、S男が虫の成長の様子に気が付くようになっていたり、優しく世話をしている様子をほめたり認めたりしながら、自分の気持ちを素直に表現したり優しい気持ちが育っていくよう指導を続けた。

ある日、卵から育てていたカブトムシが成虫になった。その事を一番に発見したS男は、他のクラスに見せにいったり、登園してきた友達に「カブトになったよ！」と目を輝かせて報告したりした。

そして、絵の得意なS男は、早速うまれたばかりのカブトムシを実によく観察し、絵を描いた。

教師は、S男の絵をクラスの友達に見せた。「S男ちゃんのカブト本物みたい」と皆からほめられS男は、大喜びであった。

ところが、数日後カブトムシが死んでしまった。落胆していたS男が「お花が咲いている所にお墓

を作ってあげよう」と提案したことで他の園児たちも気を取り直しみんなでお墓を作り始めた。

「カブトさん、うまれてきたのにすぐ死んじゃってかわいそうだね」「カブトさんの好きな蜜を側に置いてあげたよ」とS男がつぶやいている様子を見ていたクラスの友達は、S男への見方が変わってきた。

いつも、乱暴で意地悪なことばかり友達に言っていたS男だが、カブトムシとの出会いや観察などを通して、自分の気持ちを素直に表現したり、優しい気持ちが育ってきたことにより、友達関係にも広がりが見られるようになった。



決まりを守る意識

幼稚園生活には、生活をしていく上の様々な決まりがあります。幼児が決まりを守るのは、先生に言われたから、決まっているからなど大人に言われたから守らなくてはならないと思う場合が多いようです。

幼児の決まりを守る意識は、その決まりをなぜ守らなくてはいけないのか理解できない時期から、発達に応じて必要性に気づき自分から守ろうとするようになっていき、道徳性の基礎ができてきます。このことが小学校以降の学習に向かう生活態度や決まりを守る意識につながってきます。

<みんなと見ようよ！>

K男は、クラスみんなが集まって先生の話の聞いたり歌を歌ったりする時間が嫌い。いつまでも、大好きな砂遊びをしていたい。先生に何度呼ばれても、なかなか部屋に入ろうとしなかった。他の先生に連れられて仕方なく部屋に入るもののすぐに抜けだしてしまう。

教師は、K男が電車が大好きなことを知り電車の出ている絵本を捜して部屋の外にいるK男に聞こえるよう大きな声で読みはじめる。すると、K男の目が輝き、部屋に入りその絵本を見ることができた。

この体験がきっかけとなり、クラスみんなと一緒に過ごすことの楽しさが少しずつわかってきた。

いつまでも、自分勝手な行動をしていると大好きな絵本を読んでもらえなくなってしまうことにも気づき、教師の呼びかけにも応じるようになるなど生活の流れが徐々にわかるようになってきた。

